

## 解説

### 川島町・伊草地区の自然・歴史・文化を伝承する人

鈴木泰左右エッセイ集『越辺川のいろどり——川島町の魅力を語り継ぐ』

鈴木 比佐雄

1

越辺川の水は、秩父山地の山々から白く光り輝き、ゆったりと流れていた。平成二十四年一月十二日に私は川越市に暮らす作家の平松伴子さんの車に同乗して、越辺川に架かる落合橋を渡り初めて川島町に入った。そこに暮らす鈴木泰左右さんに会いエッセイ集の打ち合わせをするためだった。川越ペンクラブの発行する季刊誌『武蔵野ペン』の何冊かとバックナンバーのコピーを平松さんから戴き、その中に連載されている鈴木さんの「伊草の獅子舞い」などのエッセイを私は読んでいた。そのエッセイから獅子舞いの横笛の音色が聞こえてきて、地域文化の真の伝承者でしか書き得ない細部が生き生きと描かれていることに私は魅了された。そのエッセイを生み出した精神性は、川島町伊草地区に生まれ育ち、今も地域で一緒に暮らしている人びとの幸せを願っている深い愛情に満ちたものだった。

鈴木さんの文章には、例えば「伊草の獅子舞い」の九月十五日の濃密な一日を作り上げていく人びとの素顔や立ち姿が正確に記述されている。それ以外のエッセイにも川島町の様々な年中行事の濃密な時間を記していく伝承者としての高貴な魂を感じたのだった。昨年の初夏の頃に私は平松さんを通して、

ぜひ鈴木さんの書かれてきたエッセイをまとめて読ませて欲しいとお願いした。鈴木さんも了承してくれ、私のところに十年以上も『武蔵野ペン』と『文芸かわじま』に書き継がれてきたエッセイが届いた。原稿類を通読して私が想像していた通りの内容で編集案は短時間でまとめることができた。秋から年末年始は鈴木さんの予定が続いていたこともあり、編集案の細部の打ち合わせは新年明けになった。

鈴木さんのエッセイの構成は、五章からなっている。一章「越辺川と私」九編は、章タイトル通り、越辺川と鈴木さんの関わりを記したものだ。冒頭の「越辺川と私」では、越辺川周辺で昭和初期に、島崎藤村などの文人達が「小澤屋」という料理屋を拠点に川遊びに興じていた風光明媚な場所であったことを伝えている。その周辺で鈴木さんたち子供は、河川敷にある雑木林で「カブト虫」を見つけたり、当時は丸太橋だった落合橋の丸太の隙間に手を突っ込んで雀を掴まえたり、土手の斜面をトタン切れで滑ったり、川原で石投げ競争をしたり、うなぎやなまずを「置き針」という仕掛けで釣ったりして遊んだ。また七夕祭りの「まこも」馬を作るために対岸の川岸まで泳いで「まこも」採りをして、父に手渡し父が馬を作ったことなどは、伝統を継承してきた古き良き親子の姿を伝えている。それらのエピソードの後に次のような文章が書かれてあった。

「物心がついてからも越辺川の近くに住む私には、思い出が沢山あり、今になっても毎日のように、橋を渡り、越辺川を見ている。

川面に映る日の出、霧に霞む川、菜の花いっぱい堤防、東の方に見える大宮の高層ビル、夕日をバックに逆光で見る枯すすきなど、越辺川は素敵で好きである」

鈴木さんのように故郷の水辺をこれほど慈しみ誇りを持って語る人は、今では数少なくなっている。その郷土愛を「越辺川のいろどり」と名付けたのだらう。今の時代に最も立ち還らなくてはいけない精神性を鈴木さんは体現して生きられているのだ。そんな足元に広がる故郷の風土を担ってきた地域文化をこれからも継承して欲しいと願ってこのエッセイ集『越辺川のいろどり』が書かれたに違いない。

二番目に置かれた「白鳥の飛来」は、越辺川に冬になると飛来するコハクチョウに触れたエッセイだ。私と平松さんが鈴木さんが経営している鈴木衣料品店に到着すると、鈴木さんは、私たちに既に飛来している白鳥を見せたいと、旧道と共に生きてきた伊草地区の歴史を語りながら、越辺川の河川敷まで車で連れて行ってくれた。堤防の土手は想像を超えた高いものだった。エッセイにも書かれてあるとおり、かつて堤防が決壊し二階にまで届いた水害の歴史からこのような堤防が積み重ねられてきたのだろう。また駐車場には、「白鳥に餌を与えないで下さい」と書かれてあった。「白鳥を守る会」が餌付けをしているので、飽食をすると太りすぎてシベリアに帰れなくなるので健康管理をしているのだという。河川敷の枯れた薄や葦原を越えていくと川砂利の向うに越辺川と数十羽の白鳥と鴨が見えてきた。白鳥たちは水辺近くまで寄ってきて餌をねだっているように鳴いていた。鈴木さんの最も大事にしている風景を私たちに真っ先に見せてくれたことに私はとても感動した。左手に見える雑木林でカブト虫を採ったのだろう。雑木林の東側に道場橋が見え、その先に落合橋がある。対岸まで泳いで「マコモ」を刈り取り父に手渡し、鰻や鯰を釣る仕掛けをこしらえたのだろう。鈴木少年達がこの川原で繰り広げた光景が私の中にも甦ってくる思いがした。

越辺川の次には、旧道沿いの伊草神社に連れて行ってもらった。一章の三番目の「旧道（伊草宿）よもやま話」では、鎌倉街道の一つとしての伊草宿の歴史が紐解かれている。明治三年以前は「よろづ屋」（現在の谷屋本店）一軒だったそう。その後は国税を納めた特権としてその「よろづ屋」以外に「鈴木商店（よろづ屋）」が二番目に店を出したという。それから往来する人も増えて次々に店が開業したそう。養蚕の苦勞話」では、近郊の農家が米作りの傍ら養蚕をしていたことについて、それを担っていた嫁たちの苦勞話を書き記している。また繭の製造過程をこのように農家の家に暮らして観察したような筆致はとても貴重なものだ。「わが家のケヤキと洪水」では、鈴木衣料品店の脇にあったケ

ヤキの大樹が家を守ってくれる存在であり、四季の命を感じさせてくれる「心の憩い」だったことを語っている。また昔から語り継がれてきた洪水被害についても伝えてくれている。

「年中行事と天神講」では川島町の農村の年中行事を詳細に紹介してくれている。例えば一月は、一日の「若水」、七日の「七草」、十一日の「葺開き」、十三日の「鍬入れ」、十四日の「団子さし」、十五日の「十五日粥」、十六日の「やぶ入り」「オセイニチ」、十八日の「十八日粥」、二十日の「えびす講」、二十四日の菅原道真を祭る「天神講」。二月八日は「八日節句」「初うま」「針供養」。三月は、一日の休養をとる「三郎のついたち」、二十一日は「春分の日」。四月三日は「ひな祭り」。五月は、二日の「八十八夜」、五日の「端午の節句」、八日の「お釈迦様」。七月は、一日のふかし鰻頭を食べる「ついたち」、三十一日の「盆供養」。八月は、十三日の「迎え盆」、十五日の「送り盆」。九月は、十五日の「十五夜」、二十五日の「秋分の日」。十月は、十四日のご馳走を食べながら一夜を語り明かす「お日待ち」、三十一日のかまどにご馳走を上げる「おかま様」。十一月は、十日の「十日夜」（もぐら払い）、二十日のえびす様に新米を上げる「えびす講」。十二月は、四日・十四日・二十二日・二十四日に神様にあずき粥を供える「大師粥」、三十一日、梅干し・おむすび・年越しそばを食べる「大みそか」。このような「年中行事」である民衆の暮らしの知恵を伝えてくれている。「神社の思い出」では、大正二年に八つの神社が合社してできた伊草神社の由来や鈴木さんの身近な遊び場であり、今も「伊草の獅子舞い」が奉納される地域の「かけがえのない場所」を語ってくれている。戦後間もなく復活した当時、小学校三年だった鈴木さんは、「獅子子供」（大獅子、中獅子、雌獅子、猿若）の四名の一人に選ばれて演じたことがその後の人生を決定付けたことを語っている。その他「神事」と「干支」の二編のエッセイもこの地区の生活に密着した貴重な「年中行事」が記述されている。

鈴木さんから伊草神社、大聖寺、伊草小学校、伊草公民館、伊草コミュニティセンターなどの歴史や個人的な思い出を聞かせてもらったことは、私にとっても忘れられない良き時間であった。

越辺川おつべがわの名前の由来を幾つかの資料で調べてみると、大まかに言うと三つの説がありそうだ。

有力なのはアイヌ語説で、「お」が「持つ」とか「豊か」の意味で「べ」が川なので「豊かな川」という意味になるという。朝鮮語説も有力で、古代朝鮮語の「オッヒー」は「衣」を指し、古代の渡来人がこの地に住み養蚕をしていたことから、「オッヒー」が転化して「越辺川」になり、白く光る川を白い衣のような川と名付けた説。「越辺川」の水源説では、越上山おがみやまの附近にあり、その地区に小字越辺という地名もあり、また越生おしせにも近いので「越生辺の川」が転化して「越辺川」になったという説。その三説の中にもまだ様々な異説があり、どの説が真実なのかは確定されていないので、調べると余計に謎が深まり古代のロマンに引き込まれていくようだ。そのような意味でも「越辺川」は、太古からの古代人、アイヌ人、渡来人などの多くの人びとを魅了して生きる希望をあたえ、現在の鈴木さんたちにつながっているのだと思われる。

二章「越辺川周辺の四季」十八編は、このエッセイ集の最も「いろいろ」を放っている繊細な文章だ。冒頭の「初詣で」は例年、紅白歌合戦が終わると伊草神社に向かい、氏子総代長の零時の合図で、列の先頭からお参りが始まる様子を記している。「わが家のお彼岸」では、「此岸」であるこの世と「彼岸」である先祖の住む「涅槃」の本来の意味を考え、「お彼岸」には、親類・姉妹兄弟が集まり昔話をして若返る効用を語っている。「桜花」では、「桜」がいかにも日本の文化に根付いているかを指摘し、花だけでなく桜の木の有益性にも光を当てている。「雑草」は、除草剤を使わずに雑草を「むしる」ことをしてきた農民たちの暮らしを再評価し、家畜の餌や気温を下げるなどの雑草の効用を語っている。「梅干しの思い出」では、母の漬けた梅干しの味が忘れられずに、その味を自分で再現しようとしてその製造過程を書き記した話だ。「猛暑」では、クーラーに頼る現代の暮らしの問題点や「熱中症」の際の手当ての具体例も記している。「すったて」では、川島町商工会長である鈴木さんが職員と一緒に、川島

町の農家の家庭料理「すったて」を町おこしのために、町内の飲食店・居酒屋に勧めて、川島町の郷土料理を名物ブランドにしていく奮闘記だ。「平成の夏祭り」や「伊草地区の盆踊り」では、伊草地区に今も息づいている祭りや盆踊りの本来的な目的である「五穀豊穡」、「無病息災」、「住民の親睦」の精神の継承を、具体的な祭りの裏舞台を語りながら伝えている。「わが家のお盆」では、鈴木さんの菩提寺の大聖寺で行われる施餓鬼会を紹介している。ここでは自己の悪行を反省し善行を積み先祖に感謝することの精神を語っている。「伊草の獅子舞い」と「平成の獅子舞い」では、明和二年（一七六五年）に「汚れなき子供」という「子供獅子」が奉納されたのが起源と言われる。獅子舞いの拠点は伊草の大聖寺にあり、獅子舞いの器具なども寺に保存されていたが、昭和五十九年から「伊草コミュニティセンター」に移されて平成八年からは耐火・耐震構造の収納庫を建設し保存されているという。また獅子舞いの精神や具体的な内容が当事者の一人である鈴木さんから祭りの克明な手順とともに記述されている。その晴れの祭りの時空間が鈴木さんの横笛の音色が背後に流れている動画を見聞きするように再現されている。その他の季節を織り込んだエッセイも貴重な内容を含んでいる。三章「川島町の現在」十二編は、川島町の現在の食文化である「すったて」や「呉汁」などの魅力や、圏央道が開通したなど暮らしの変化を伝えている。また四章「高齢者は語る」十一編では、高齢化社会の暮らしの様々な問題点も指摘し、それでもより良く生きる提言をされている。五章「川島町行事のあいさつ」十編では、鈴木さんの公的な仕事でのあいさつ文を収録している。地域の人びとの幸せを願って働いてきた思いが伝わってくる。

以上のような編集案の打合せをしながら、私と平松さんは「かわじま呉汁」をご馳走になった。鈴木さんと私たちが呉汁を出している店に入ると、店を切り盛りしている若夫婦は、鈴木さんを大切な父のように迎えていた。きつと鈴木さんは彼らの将来のために公的な仕事で汗を流してきたのだろう。

越辺川を愛する一人の人間の物語だけでなく、地域の多くの人びとの郷土愛が織り込まれている清々しいエッセイ集を多くの人びとに読んで欲しいと願っている。